

Title	高橋哲夫著 安積開拓史：ある偉大な遺産
Sub Title	
Author	小松, 隆二
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1963
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.56, No.8 (1963. 8) ,p.787(103)- 788(104)
JaLC DOI	10.14991/001.19630801-0103
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19630801-0103">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19630801-0103</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

宇野弘蔵著

『経済学の方法』

(経済学セミナー(1))

さきに宇野弘蔵氏は、『経済学方法論』(一九六二年、東大出版会)において、永年にわたる氏の経済学研究のうちから得られた方法論的な成果を公けにされた。それ以前から、氏の方法論に対しては多くの論議が重ねられてきただけに、非常な興味と関心とをもって迎えられたことは確かである。その後の論評においてあきらかにされた如く、いまだに多くの納得しがたい点(乃至は、根本的に立脚点を異にする点)を残しているということも否定しえない事実である。ともかく、『方法論』が卒直に、他からの批判点にこだわるところなく、氏の見解を明らかにしたのに反して、本書は最近数年間に氏の経済学方法論に寄せられた主たる批判をとりあげ、それに論評を加えるという体裁をとっている。従って、総じて、方法論という見地からどこがどう対立しているのかは、『方法論』よりも一

層明白に看取りうるであらう。

ゼミナール形式で展開される本書が、宇野氏に対する主たる批判として取りあげているものは、遊部久蔵氏と、佐藤金三郎氏とのそれである。おそらく、遊部・佐藤両氏の宇野氏への批判が、方法論に関する最近の有力な批判であることからすれば当然のことといえよう。いまここで、批判と反批判との詳細については、本書自体の内容に譲るはかばかないが、本書の内容を大別すると、(一)いわゆる「三段階論」について、(二)マルクス経済学と近代経済学、(三)「価値法則」を中心とした経済法則の存在と論証、及び商品論の意義について、という三つになるであらう。

(一)においては、遊部氏の「プラン」解釈を中心としての宇野氏への批判。さらに遊部氏の見解をもふまえて独占段階の理論的研究を中心として原理論・段階論の関連に疑問を提起した佐藤氏の批判に比べると、注目がとれている。とくに中心論点はないが、注目されるのは、段階論の見地からみた産業資本と原理論の展開基盤たる産業資本とを区別されようとする点であらう。ここでは原理論における純化と、段階論における産業資本段階か

ら金融資本段階への転化のさいの外部的要因の重要性を対称し、段階論と原理論とが一義的につながるものでないことを強調されている。(二)においては、遊部氏が強調されるマルクス経済学と近代経済学との「対立」という点をとりあげられる。遊部氏らが、近代経済学批判をつうじて経済理論の科学性や、その「原理の基盤、性格、限度」があきらかになるという点に対して、宇野氏は、マルクス経済学の原理そのものの基盤、性格、限度をあきらかにすることこそ、(とくに独占理論をどう取扱うかに関連して)「科学的」たる前提だとされる。さらにこの点から、原理と政策との関連、原理と実践との関連について、独自の「現状分析」論がのべられ、さらに経済学史の役割が、「原理」の成立、純化過程をあきらかにするにすぎないという見解をとられ、遊部氏の独立の科学としての経済学史という考え方を批判されている。

(三)は、本書、いな、宇野氏の『経済学方法論』の総体的に示す最も重要な論点に関連している。とくに、「原理論」がとりあげられる「法則」の論証という点に中心が置かれ、とりわけ、価値法則の問題が前面に出されている。この

点は、『資本論』における商品論(労働価値説)の論証という、経済理論中最も論争的問題にかかわる。ここで、またしても遊部氏が批判の矢表にたたされる。遊部氏が近年強調されている価値法則の「存在過程」と「認識過程」との区別という点から出発する。宇野氏は、遊部氏の主張が結局のところ「単純商品説」(商品経済史観)に帰着するものとし、むしろそれに反して、経済学(原理論)の対象の「存在」自体に注目しなければならぬとする。いわゆる単純商品説が、資本主義的生産を商品生産のうちから生れたものとして説くこととなり、いわゆる「原蓄」の意義、ことに経済法則論証という面からの意義が滅却されると批判される。例えば、「単純商品経済からそれ自身で資本主義が出てきたんじやなくて、封建社会のなかへ滲透した商品経済から資本主義が出てきた」といふとき、分解は商品経済に行われるのでなくて封建社会に行われ、それによって商品経済が資本主義として新たな社会関係、生産関係を展開する。なにも原始的蓄積を過大に評価しているわけではない。むしろそれを無視して商品経済の発達から当然資本主義が出るというはら

が、おかしい。(一〇八頁)

さて、以上で本書の概要を示したが、宇野氏の方法論は、方法論にありがちな抽象性がない。それは、『方法論』においても、本書においても、氏がつねに経済理論を具体的に検討するうちに独自の方法が生かされているからであらうし、たとえ批判の余地があろうとも「科学的」たらんとしているからであらう。そうした点はわれわれの学びとるべきことであるかもしれない。だがそのような方法論に立脚して出てきたものが、「マルクス経済学」ではなく、まさに「宇野経済学」だということを感じないわけにはゆかない。かかる現状に直面して、真に社会科学の方法たるべきものが何んであるかをあらためて個々の研究分野での共通の問題意識にすることなくして、経済学の領域での本書に示されたような対立を克服する道はないであらう。それは、体制認識の基礎科学としてもつ経済学の意義をあらためて問うことであらう。(法政大学出版局・一九六三年五月刊・B6・一二一頁・二三〇円) 飯田裕康

高橋哲夫著

『安積開拓史』

—ある偉大な遺産—

従来、近代史ないしは賃労働史において、個別的な部門研究、特に職人層や士族層の分解、再編成をめぐる研究は看過されがちであった。本書は、このような空白をうめるものとして明治初年の士族授産の過程ですすめられた福島県安積(あさか)地方における士族中心の開拓事業を解明したものである。

封建制度の崩壊と新政府の出現により、族制整理、禄制改革さらに禄制廃止の遂行と、同時に士族の特権を否定する職業の自由や徴兵制など近代化への変革が推進される中で、士族層は分解し零落してゆくが、他方で困窮士族に職を与えて新政府に対する反抗をそらし、さらに殖産興業政策の観点ともあわせて士族授産事業が実施される必要がでてくる。

そして、この過程で士族層の一部はインテリゲンチヤないしは新時代のエリートになり、他の一部は賃労働者化されて不熟練労働力を主体とする賃金労働者となり、またある一部

は帰農し、さらに圧倒的な大部分は下層社会に沈殿し、ルンペン・プロレタリア化してしまわなければならない。

本書は、これらのうち、帰農士族に光をあて、「開墾創始の地」といわれる安積地方の疎水開墾を中心にした開拓事業を貴重な未発表史料をふくむ長大な史料を駆使して克明に追究したものであるが、その内容は次のような章からなっている。

第一章・開拓のあけぼの、第二章・用水を求めて、第三章・刃を鋏にかえて、第四章・士族のゆくえ、第五章・開拓地の人びと、附録一・史料(一八項)、附録二・参考文献。

安積地方は郡山市周辺にあたり、当時、広大な原野を有しながら、灌漑設備の欠陥などにより放置されたままであった。ところが明治四年頃から福島県では独自に安積地方の中央にある大槻原の開墾を企て、富商の出資により開成社を設立し、安積開拓に着手した。やがて、西南戦争後の明治一二年頃になると、ますます深刻化してゆく士族の没落に対し、政府は国営事業として安積全域の開拓にのりだすが、それによって九州の久留米をはじめ全国各地から帰農士族が移住し、大原野の開

拓に従事することになったのである。この入植者の多くは下級士族であったが、開拓の道はけわしく、悪戦苦闘の連続であった。その結果、猪苗代湖から水を導入する疎水工事の完成をみるにいたり、収穫量などでは問題はこのころのもの、原野の耕地化など開拓事業そのものは進展したといえる。しかし他方で、その担い手となった士族については、転職した若干の成功者をのぞき、多くは零落し、あるものは小作人となり、あるものは脱落して離村し、またあるものは罪人となるなど、士族授産の目的ははたしえずに終ってしまった。だが、それにもかかわらず、現在八千町歩の水田を灌漑して安積地方農耕の支えとなり、しかも郡山周辺の工業化に寄与してきた疎水の完成をはじめ、開拓の足跡は「偉大な遺産」となって今日も生きています。

著者は、この過程を従来閑却されがちであった「開墾に直接従事した士族の動向や、一般移住者、あるいは開成社の小作人等、総じて安積地方における人間関係」を浮き彫りすることによって生き生きと描きあげているが、文章の平易さと共にその手法は成功的で、深い感銘をもって「近代史屈指の雄大な

ドラマ」をわれわれに語りかけてくれる。ほかに本書の特色をあげるならば、著者も指摘するとおり、安積開拓(士族中心)とその先駆をなす大槻原開墾(富商の出資により士族と一般民による)を区別するなど、歴史的推移を明確にとらえていること、これまでのような疎水史中心の研究を是正していること、開成社員をはじめ多くの人物の詳細な究明、士族の移住定着没落過程やその実績などの跡づけ、士族移住者と一般入植者や小作人の関係の解明、さらに豊富な史料や現地踏査による実証的究明などの点である。

しかし、これらの諸点についても、部分的にはさらに深い解明が必要と思われる点もないうわけではなく、福島県ないしはわが国全体の社会的変革との関係や、他の士族層との相関的な把握等も次の段階ではより深く考慮されてよいのではないかと思われる。だが、それは本書の範囲外の課題であるといえ、いずれにしても、本書はみずごされがちな特殊部門に真摯な態度でとりくんだ労作であり、近代史研究における一つの成果といえるであろう。(理論社・三八年三月刊・B6・三六六頁・八〇〇円) ！小松隆二